アルプス
―スイスの山と人―

岩波写真文庫　30

アルプス ——スイスの山と人——

編　集　岩波書店編集部
監　修　松方三郎
写真提供　スイス連邦在日使節團　スイスA. T. P.　写真通信社　松方三郎

エーデルヴァイス

アルプスというのはフランス、スイス、ドイツ、イタリア、オーストリアの五ヵ国にまたがった山群であるからスイス一国の独占物ではない。しかしアルプスの中ではスイスのアルプスが地理的に中心になっているし、広く親しまれてもいるから、スイスのアルプスにアルプス全体を代表させても、けっして無理だとはいえない。スイスのアルプスが広く親しまれているのにはいくつかの理由がある。第一に登山者の立場からしても、観光客の立場からしても設備がよく整っている。もっともこのことは、山小屋や登山鉄道がりっぱにできているといったような意味だけでいうのではない。山を求めてきた人々を楽しませるような和やかな空気が宿屋に泊っても、山小屋に入っても、鉄道に乗っても、いたるところにただよっているということなのだ。このことはスイスの人々、ことに山村の人々の暖い心や愼しみ深い生活と切り離して考えることのできないことだ。

スイスの山は美しい。しかしそこに営まれる人の世界もまたわれわれの心を引かずにはおかないのである。

目　次

定価100円 1951年6月25日第1刷発行 1958年2月20日第9刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 柳川太郎 印刷所 東京都板橋区志村町5 凸版印刷株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社 岩波書店

東から見たヴァイスホルン

ベルンからオーバラントを望む

オーバーラント　晴れた日にベルンの町から南のほうを眺めると、はるか彼方にオーバーラントの山々がえんえんと連っているのが見える。左のはしが、ヴェッターホルンで、それから右にシュレックホルン、フィンシテラールホルン、そしていわゆるオーバーラントの三山、アイガー、メンヒ、ユングフラウがその次に続く。ユングフラウはオーバーラントの山の中では何といっても盟主だ。構えも大きいし、これを取りまく氷河も雄大なのである。しかし山の分列式はまだ続く。ユングフラウまででこのパノラマはまだ半分にもならない。右へきて目だつのは、眞白なブリュムリスアルプの三峰だが山の波はそれからまだ西に走ってドルデンホルン、ヴィルトシトルーベルを経て、ようやく低くなってゆく。

東西を計ると六〇キロ余の

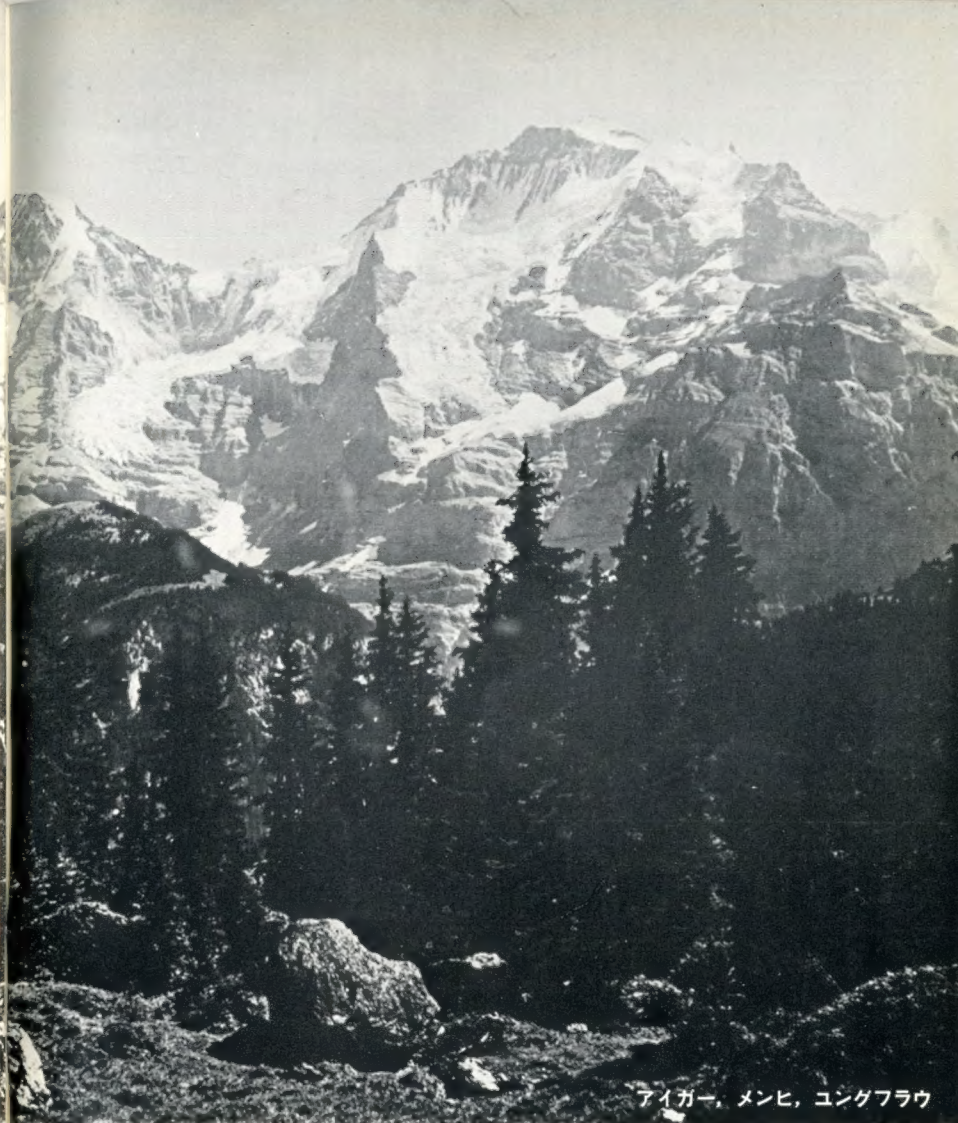
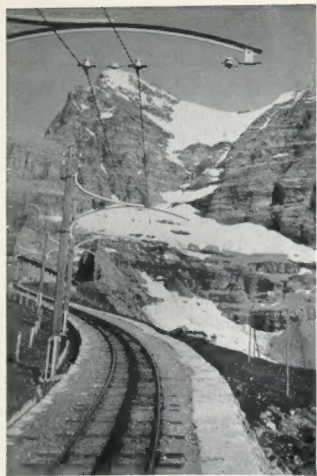
大きなパノラマとなるが、それを大体六〇キロ離れて見ているのだから東京を中心に考えて見れば、箱根、丹沢の線上に三〇〇〇メートルから四〇〇〇メートルの山脈がならんでいるのだと思えばよい。

　北海に注ぐラインと地中海に入るローヌ、この二つの河は黒海に通ずるドナウとともにヨーロッパの三大河といわれるものだが、そのラインとローヌとの二つの河の分水嶺をなすものがオーバーラントの山だ。だからその意味ではオーバーラントの山々こそはヨーロッパの脊骨だといってもいいのだ。

　オーバーラントの山の特徴は何といってもその大きな氷河だ。ヨーロッパ第一のアレッチ氷河もその源はユングフラウに発しているが、延長二六・八キロ、面積一一五平方キロだというのだから、一つずばぬけて大きいのである。

ユングフラウ登山鉄道．右手に見えるのがおなじみのユングフラウ．

➡

インターラーケンの方面から見たユングフラウ，メンヒ，アイガー三山の眺め．アルプスの眺めはどこから見ても壮大で美しいには違いないが，長い年月のうちに，同じアルプスの風景の中にも，なんとなくこれこそ典型的な眺めだとされるような展望がいくつかできてしまった．よくいえばアルプスの展望の中で古典的な格式を与えられた風景とでもいうのだろうがかならず絵葉書にでてくるおきまりのアルプス風景だといってもよい．この写眞もオーバーラントでの，そのもっとも代表的なものだ．

アイガー，メンヒ，ユングフラウ

アイガーを望みながら登ってゆく.

ユングフラウ鉄道は，その終点であるユングフラウヨッホが3457mだから，登山鉄道としては世界一だ．アイガーの胴中をぶちぬいてさらにメンヒの下をくぐり，最後にメンヒとユングフラウとのあいだの鞍部にでてくるのである．ふつうユングフラウに登ろうとする人は，ここで山案内をやとって頂上を試みるわけだ．電車でゆけば眠っていても，ともかく，この鞍部まではゆきつけるユングフラウも，北側からぶつかれば，アルプス中でも有数の難コースだ．まる一日，氷河との苦闘が続けられる.

ユングフラウ（航空写真）

グリンデルワルトからアイガーを望む

グリンデルワルトの谷から見上げたアイガーはすばらしい眺めだ。村の中心と頂上との水平距離を地図で測ると六キロしかないのに、高さの違いはだいたい三〇〇〇メートルもあるのだから、下からその頂上を見上げる角度はすぐ見当がつくと思うが、そのアイガーがちょうど村の南にそびえているのだから、人々は一年中この大きなついたてのかげで暮しているようなものだ。

アイガーの頂上（三九七五メートル）は一八五八年に初めて登られているが、その東北山稜はあまりに難しいので最初に試みられてから殆んど五十年の間、いくたびかくりかえされた攻撃をいつも退けてきていた。だから一九二一年九月に日本人の槇有恒氏がこの山稜の初登頂に成功したことはグリンデルワルトにとってはもちろん、アルプス登山史上での一大事件だった。

アイガー

アイガー（航空写真）

↑ 1921年の東北山稜からの初登頂を記念して，その尾根の上に小さな山小屋ができた．わずか数人でも，いっぱいになるくらいのものだが，谷からでもはっきり見える小屋だ．

← 上 槇さんのパーティーは現在の小屋から少し上の尾根て夜営して，翌日山稜にぶつかった．いくつかの難場をきりぬけるために 6m の棒をかつぎあげた．岩のでっぱった所はその棒の助けて登った．

当時の山案内人３人のうち，アマッターとシトイリーとはすでに故人となった．最年少のブラヴァントも現在 50 を越え，ベルン州の建設大臣である．

シュレックホルン

シュレックホルンはオーバーラント随一の岩山．尾根をへだててヴェッターホルン三山が見える．左からハスリ・ユングフラウ(3703m)，ミッテルホルン(3708m)，ローゼンホルン(3691m)．

フィンシテラールホルン

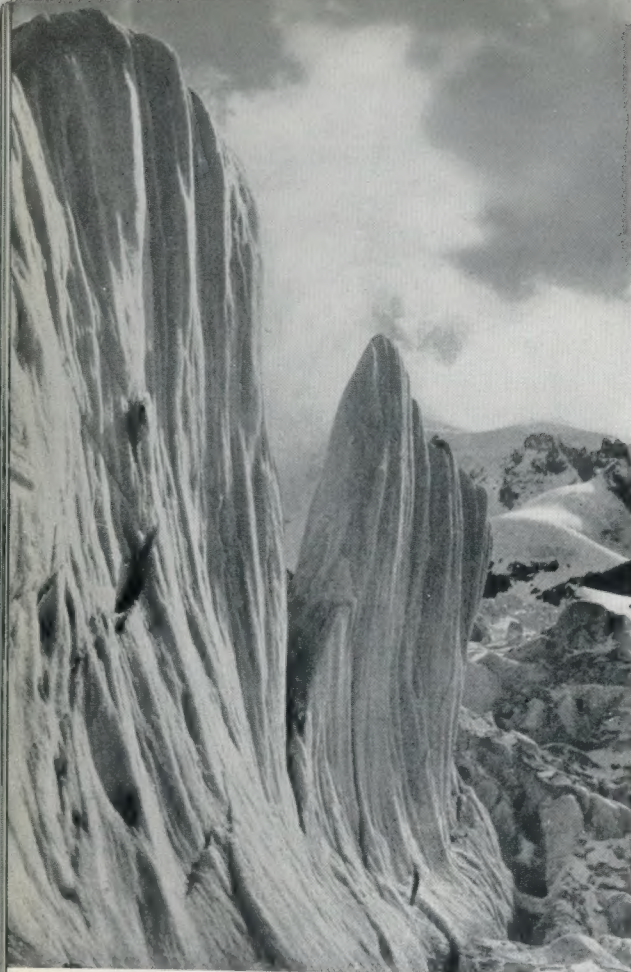
フィンシテラールホルンはオーバーラントでは一番高い山だ（四二七五メートル）。ベルンなどからはるかに眺めると、蝿でもとうていとまれないだろうと思われるほど鋭くとがって見えるが、実際にぶつかって見るとそう心配することもない。山としては十九世紀の初めから試みられているから古くから問題になった山だが、当時は今日のルートとは反対のむずかしい方面から試みていたので成功していない。それでも一八二九年には有名な自然科学者のヨーゼフ・フギの隊が頂上に達しているから、アルプスの頂上の中では比較的早く登られたものに属する。

　しかし、今日では、どちらかといえば平凡化してしまったこのフィンシテラールホルンも、方向をかえて東側から登ろうとすれば、たいへんにむずかしい山登りになる。しかもこの東側の岩壁に最初にぶつかったのがガートルード・ベルなる一人の英国の婦人登山家であったということは記憶するに値する。もっとも、このベルの試みは悪天候のために失敗している。しかしベルは丸一昼夜半つづいた吹雪の中をとにかく無事に退却したということでたぐいまれな登山家と、今でもその名をうたわれているのである。

西から見たフィンシテラールホルン（航空写真）

エンゲルホルン

↑
現在，ふつうに登るルートは，この西側になっている．東側は，頂上から氷河の底まで直下1000mの断崖．登山家ベルがはじめて登頂を試みたところ．

↑
雪の山ばかりのオーバーラントであるが，その中にはこんな岩山もある．ここも今世紀の初めベルが開拓した岩場だ．ベルは登山家としても鳴らした婦人だが，考古学者，アラビア探険家としていっそう有名である．晩年はイラク王国の政治顧問となって，その方面でも政治家として大きな業績をのこした．

氷　河

アルプス最大の氷河といえばアレッチ氷河だ．いちばん幅の広いところでは2km近くもある．ユングフラウヨッホの上から見下すとまるで大きな一面の雪原を見るようである．しかし氷河のところどころには大きな割れ目が口をあけており，しかもそれが雪の下にかくれていたりするのだからけっしてゆだんはできない．

アルプスの特徴の一つはそのすばらしい氷河だ。日本ではかつて氷河が存在していたことがあるかどうかといって学者の間で議論の対象になったり、氷河の痕跡をさがしたりしているような心細い話なのだが、アルプスでも、あるいはそれ以上の高い山、たとえばコーカサスやヒマラヤ、アンデスなどでは氷河はつきものなのだ。

山に積もった万年雪が固く氷になってしまってできたものが氷河だから、山の斜面にかかる懸垂氷河と呼ばれるものもあるが、山の谷をうめている氷河がもっとも一般的なものだ。その名のごとく氷の河だ。そしてそれが底部の地形如何で、時には一面の氷原となったり、時には氷の滝のように急斜面にかかったり、千差万別だ。だから、この氷河の秘密を知ることはアルプス登山の第一歩なのである。

ユングフラウヨッホから見たアレッチ氷河

アレッチ氷河の末端

山　小　屋

↑

自然の岩小屋にかわってたてられた山小屋も初めは簡単な木造であったがだんだん進歩して，今日ではガッシリした石の本建築がふえつつある．山小屋は登山家にとっての作戦基地であり，山の中の安息所でもあるからいかに小さくとも一応の設備をもっていなければならない．スイスの山登りの楽しさの少なからぬものが，そのよく整った清潔な山小屋からきていることは誰しも認める所だ．

←

ユングフラウヨッホのホテルは世界でいちばん高いホテルだろう．近くには高層気象観測所もある．

アルプス登山の開祖は，氷河研究の動機から山の中に入っていった自然科学者達だった。だから，山小屋の元祖がやはり自然科学者だったといっても不思議ではない。どこの登山の歴史を見ても山小屋ができる前に岩小屋の時代がある。つまり自然の岩を利用し，その下や間で夜を過ごした時代だ。アルプスでも氷河研究の先達ルイ・アガシがウンテラール氷河の上の岩小屋を根拠地としたのが山小屋の前史時代を代表するが，まもなく，この基地は氷河の上から山のふもとの小屋がけに移っている。

現在のドルフス小屋は一八四五年に同じ場所にできた最初の小屋の改築されたものだが，歴史的にはアルプスでいちばん古い小屋だといってよい。アガシの岩小屋のあった氷河を上から見おろして建っているのである。

ガウリ小屋

ドルフス小屋

ヴァリスの山々へ

ツェルマットこそ山の世界のメッカだ．ニコライタールを南につめた最後の村がこのツェルマットだが，近頃は冬も軽便鉄道が通うそうだ　そうなる前はほんの夏場の一月半ばかりの登山センターで，あとは眠ったような静かな町だった．谷間の部落だから，道らしいものは中心に一本あるだけで，登山者も観光客も山案内も明けても暮れても，この一本の道を往ったり来たりしては，油を売っている

ツェルマットからヴァイスホルンを望む

オーバーラントとヴァリス

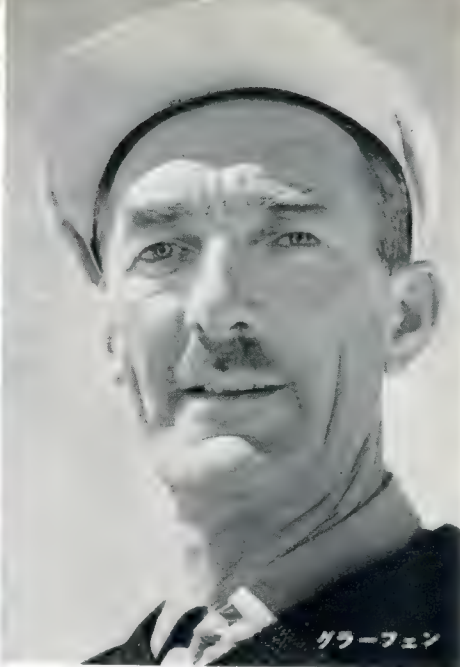
この二つの山群はスイスのアルプスの中の双璧だ。どっちかといえばオーバーラントの風景は開放的で明るいが、ヴァリスの風景は重く陰影が深い。山の高さも一段と高くはあるが、谷が深く急だからだろう。村という村が山の中腹に小さくかたまっているのなども、この地方には恐ろしい雪崩が多いことを証明している。家が小さい面積にかたまる結果はそれの建てかたに影響し、ヴァリスに入ると三階建、四階建の家が目につくのである。そしてだいたいは一階ごとに別の家族が住んでいるのだから木造のアパートだと思えばよい。

宗教からいってもオーバーラントはだいたいは新教に属し、ヴァリスは旧教区域に入る。山案内とかスキーの先生とか近頃は大分仕事もあるが耕地の少ないこの地方では昔から失業問題が深刻だったといわれている。ローマの教皇廳の衛兵になっているスイス人は多くこの地方出身者だといわれているが、こんなことも関係があるかも知れない。

しかし冬は雪に深く埋もれるヴァリスの谷も、山一つこえればイタリアであり、フランスだ。尾根越しに見る南の空に南国のかがやきがあったとしてもそれは不思議なことではない。

メルヒオール・アンデレック(1828〜1912)はその技倆といい，思慮といい，人格といい，山案内中の山案内ともいうべき人物だった．アレクザンダー・ブルゲネル(1846〜1910)は山案内としては二代目を代表する一人で，マムメリーとエギーユや，マッターホルンのツムット尾根を駆け廻った岩場の猛者だ．最後は雪崩で倒れたが，‘人間の花崗岩’と呼ばれたほどのつわものだった．

山案内人　アルプスの登山で大切な役割を果しているのは山案内だ。山案内というと客の荷物をかついで山に登る人夫に毛の生えたもの位いにしか考えない人もあるだろうが、百年のアルプス登山史上この山案内人達の演じた役割はまことに大きいのである。かつては、有名な山案内の一人一人の生い立ちや経歴を銘伝式に書いた立派な本があったくらいだから、当年の山

名山案内とうたわれる者は二代目にも三代目にも少なくない．フリッツ・シトイリー(1879〜1950)もユングフラウを1000回以上も登った経歴の持主．1921年のアイガー東北山稜初登頂隊の一人．秩父宮をはじめ彼の世話になった日本人はすくなくない．アレクザンダー・グラーフェンは現役の一流どころ．ツェルマットの生まれだが，その足跡は，遠くヒマラヤにもおよんでいる．

クリスチャン・アルマー(1826〜1898)がヴェッターホルンの頂上で金婚式を祝ったのは1896年のことだったが，山の書割を前にしたこの写眞はそれを記念したものである．アルマーはじつに多くの初登頂の記録をもちながらも，遭難らしいものには生涯にたった2回しかぶつかっていないということだから，いかに思慮分別のゆきとどいた優秀な山案内だったかがうかがわれる．

案内の大物たちがどれほど立派な腕前を備え、鋼鉄のような意志と優れた性格を持っていたかがわかるだろう。山のなかに生まれ、その生涯を山に打込んでしまった彼等であるから、なりわいのための山案内業とはいえけっして商賣人の気持で山に入っていたのではない。第一に彼等の山に対する愛着はとうてい平地に育った人々の比ではないし、先達として山を技術的にこなしている点でも驚くべきものがある。

登山がだんだんアルプスからコーカサス、ヒマラヤ、南北アメリカとほかの大陸にのびてゆくにつれ、アルプスの山案内人達の活躍する舞台が自然にひろがっていったのは彼等が山登りにかけて非常に優れた腕前を持ち、またともに山に入る仲間としてまことに好ましい風格を備えていたからだ。

モンテ・ローザとドーム

二つの写眞はいずれもこれらの山の大きさをじつによくあらわしている．山をとりまいている大きな氷河，その氷河に入っているクレヴァス（亀裂），みな手に取るように見える．これが夏だとコバルトブルーに澄んで見えるのだから，なかなかすごいながめだ．その上に雪がかぶっていて上からは見通せない割れ目まであるのだから十分用心してかからぬと氷河渡りは危険だ．

きわめて大きく分類するとアルプスには二つの型の山がある。岩の山と雪の山だ。ヴァイスホルンやマッターホルンは岩そのものの山だが、モンテ・ローザやドーム（四五五四メートル）などは頂上までほとんど雪と氷でおおわれている山だ。人にはおのずと好き好きがあるから、同じ山でも岩山の好きな人もあるし氷の山でなくては気のすまない人もある。岩場組にいわせると、モンテ・ローザなどは半分寝ぼけていても足を動かしていさえすれば登れるようにいうが、これで実際はなかなか手ごわい山なのだ。つまり、雪や氷のほうが十分にこれをこなす段となると、体力もいるし、修練も心要なのである。由來、岩場にかけては素人でもかなり練達の士がいるものだが、氷の上ではこのような素人はなかなか見つからない、というのは氷のほうがむずかしいということを物語るのである。殊にヒマラヤのような大ものにぶつかる場合にはよほど雪や氷のほうの修練を経ていないとむずかしいのだから、こうした雪や氷の山はけっして甘いものと考えることはできない。

西側から見たマッターホルン

マッターホルンは四五〇五メートルだから同じスイスのなかにあるモンテ・ローザ(四六三八メートル)やヴァイスホルン(四五一二メートル)のほうが標高の点では高い。また、アルプスでの最高峰であり、ヨーロッパでの最高峰でもあるフランスのモン・ブランの如きは四八一〇メートルで、マッターホルンより三〇〇メートルも高いのだ。それにもかかわらず、マッターホルンがまるでアルプスの象徴であるかのように見られているのは第一にその特徴のある山の姿にある。この山はまた、アルプス登山の歴史のなかでもっとも劇的なウィムパーの初登頂の物語と結びついているというところから、誰でもアルプスというとまず、マッターホルンを思いだすわけなのだ。七たび失敗を重ねた後にウィムパーがはじめてこの頂上に立ったのは一八六

マッターホルン

マッターホルンの姿はながめる方角によって，こんなにもちがって見える.

→

マッターホルンを西側から見たもの. 1879年にマムメリーがはじめて登ったツムット尾根は北側で写眞では左手に見られる.

←

スイスの側から見た姿でマッターホルンの眺めとしてはいちばんポピュラーなもの. ウィムパーのルートは眞正面に見える尾根に沿っている. ツムット尾根はこの写眞の右.

五年の七月のことだったが、彼の一行はこの歓喜の絶頂にあったすぐ後で同行七人のうちの四人までを失うような悲惨な遭難事件を起している。

こうしたことも手伝ってこの山はアルプス中の別格に祭りあげられている。

アルプ

マッターホルンを望む
ツェルマット附近のアルプ

四千メートルの頂を支える土台はアルプだ。アルプは地理学的には雪線の下の、それに接した草原地帯だが、せまい谷のなかで一年中を暮さなければならない山村の人々にとっては、その家畜を放牧する大切な牧場なのである。しかし、それも短い夏の間のことで、秋から冬に雪がだんだんとふり積もってゆくと、もう人間はもとの谷底の生活のなかに追い込まれてしまう。だからアルプにまで山村の生活が登ってくるのは一年のうちの三、四ヵ月に過ぎないのだが、家畜の面倒も見なければならないし、村から毎日往復するのも一仕事なので、どこにいってもアルプには牧夫たちの住む小さな小屋やそこで作ったチーズなどを保管する物置小屋ができている。丸木造りの正倉院の校倉造りを想わせるような小屋だが、アルプの風物のなかにはどうしてもこの小屋がなくては絵にならない。あたたかいアルプの草の上に寝ころび、牛の鈴の音が響きわたるのを聞きながら、大空にそびえ立つ頂が音も立てずに雪煙を飛ばしているのを眺めていると、誰しも、この世のなかに、これ以上の幸福がありうるものだろうかと疑わずにはいられない。

ツェルマットの上のアルプからマッターホルンを見る．向って右にはツムット尾根（西北）が長く雪尾根をひき，左にはイタリア国境のフルグ尾根（東南）がそそりたつ．真中のスイス尾根（東北）は北風を背にうけて南からの雲を追いかえしている．山ではこれを山がラウヘンする（煙草をふかす）という．

アルプの生活

➡
アルプに緑の五月がおとずれるころ，牧夫たちは牛を追いながら山をのぼる．この行列はまず山羊が二三匹．これに大きな鈴を首に下げた年長の牛が続く．その後をはじめて牛の長い行列がのぼる．

⬅中
アルプでの牧夫の大きな仕事の一つは乳しぼりだ．しぼったミルクを一ヵ所にまとめるのだが，木製のミルク桶は，慣れないものだと，とてもしょっては歩けないほどに重い．

⬅下
牧夫たちの住居は牛小屋の一隅を仕切った粗末なもので，食事もパンと小量の肉と，それにミルクとチーズだけだ．このように簡単な食物で夏の間激しい労働に従事するのだから，その労苦もなみたいていなことではない

牛　お　ろ　し

アルプに秋がくると，草の枯れはじめた牧場をあとに牧夫たちは牛をつれて谷間の村に戻ってくる．その鈴の音が，秋の空気をふるわせてひびきわたるころになると，谷間の村は急に活気づいてくる．

牛のくびに下げる大きな鈴は農家に代々伝わったものだが，中世のころからのものも珍らしくない．

チーズは牛の持主にその頭数に応じて分配される．アルプでは牛は共同に管理されているからである．

チーズの分配がすむと村人はチーズの収穫を神に感謝して，祈りを捧げる．

谷　スイスで谷(タール)ということはしばしば一つの世界を意味する。高い山で谷と谷とを隔てているから、一つ一つの谷が別々の生活をつくり、それぞれの傳統を生み育ててゆくということは容易に理解されることだ。つまり谷ごとに小さいながら一つの世界を作っていたのであるし、交通の発達した今日でもまだまだその傾きは残っている。言葉一つをとって見ても同じドイツ語系のスイス方言でも一つの谷と隣の谷との間には幾分かの相違があることは珍しくない。ヴァリスあたりでは山一つへだてて一方ではドイツ語系の方言が通用し、他方ではフランス語系の言葉が通用するような場合もある。沢山の、古くから傳えられたコスチュームが今日なおその個々の傳統を失わないでまもられているのも、こんなところからきているのだろう。

(上)，オーバーラントのカンデルの谷．背後はブリュムリスアルプ．(下)，ヴァリスのニコライの谷，テルベルの村．(右)，冬のグリンデルワルト．ヴェッターホルンを望む．

谷　間　の　生　活

•

谷間の人達の家は地方地方によってそれぞれ独特な建てかたがされている.

•

いくつかの言葉が語られている地方では，同じ言葉の人々はそれぞれかたまって部落をつくっている．写眞はティチノ州のとある村．手前の部落と後に見える部落とでは話す言葉がことなっている．家の建てかたもはっきりと違っているのがわかる．

•

ネズミを防ぐために床下に工夫してある家．見る人が見れば，この写眞だけでも，ヴァリス州のものだということがわかる．

•

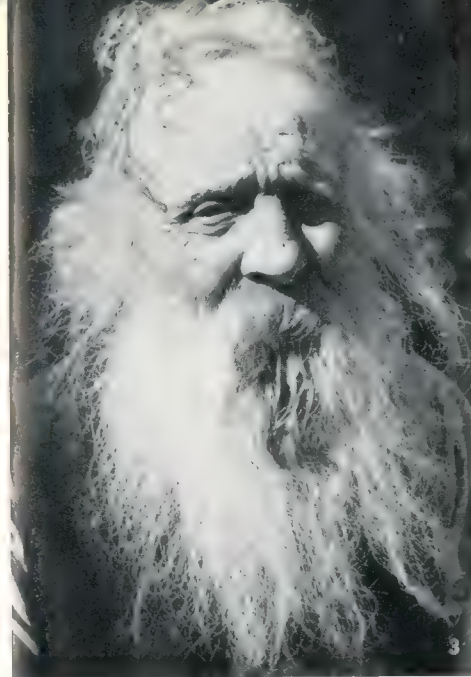
家はほとんどみな木造である．ときには漆喰さえ使っていないものもある．

都会から遠く離れた山村の生活は，どちらかといえば原始的て，農耕にしても斜面のせまい土地を利用するというのだからなかなか大変なしごとだ．

洗濯も電気やガスのある都会とは比較にならないほど苦労がいる．文明の恩恵はせいぜいブリキと瀬戸引きの容器ぐらいだ．

ジヤガ芋の収穫．斜面なので手鍬で少しずつ掘りかえすよりしかたがない．

山地の麦打ちは平地とはまたちがった趣きである

谷間で家畜に与える牧草は夏場にアルプで刈り取ったものを近くの小屋に集めておき，冬になってから雪を利用してアルプからおろしてくる．もちろんソリも使うが，なかなかむずかしいしごとだ．

1）　婦人は農村の大切な働き手で朝早くから日いっぱい野良で働く．楽しみは取り入れ．イチゴの収穫をゆりかごまで動員して運んでいる．子供たちはいつも母親といっしょだ．
2）　男たちに昼食を持ってゆくのだろう．小さな子をカゴに入れて畑にまでつれてゆく．
3）　山間のとある村で出会った老農夫．頑健なからだはさながら中世の戦士を思わせる．
4）　55歳だというこの老婆はまだ元気に畑に出ている．顔に烈しい労働のあとが見える．
5）　作業のあいまの憩いの一とき．明るい日ざしに，そよ風が少女のほおをなでてゆく．

3

1

4

2

山村の衣裳

山村の人々は元来が保守的で，服装も昔からの風習を大切に保存している．そして谷ごとにそれぞれ独自なものが残っているので，盛装を見ただけでどの谷から来たのかがよくわかる．古い衣裳をとくによく伝えているのはシュヴィーツ，ウリなどのスイスの古い州や，ヴァリス，グラウビュンデンなどの山地の州で，たいていは祖母から母親へ母親から娘へと代々ゆずり伝えられるものが多い．一般に日曜日だとかお祭りだとか，なにか事のある時には身につける習わしになっていて，日曜日ごとにかならず古い衣裳を着る地方も少なくない．

↑ コーラスをする少年たち．

こんな服装の娘さんに不意に出会ったら，童話の国に来たかと驚くだろう．

山地でよく行われる衣裳祭りの一風景である．ダンスにうち興じている人も，それを見ている人も美しい衣裳で楽しそうだ．

りっぱな衣裳をつけたプェラフの母親と娘．この村のあるグラウビュンデンの州は，とくに昔ながらの美しい衣裳を残していることで知られている．

日曜日の礼拝をすまして教会をでる婦人たち．大人も子供も，昔からの古風な衣裳をつけている．ふつうの服を着ている子供が，まるで異端者のように見えるという風景だ．

衣裳のいろいろ

1) 美しい婦人帽．バラの小枝がシシュウしてある．このようにシシュウの題材は，身のまわりの自然から取ったのが多い．

2) すばらしい金色のシシュウ．むかし栄えた土地なのだろうか．豪華なシシュウからしのばれる．

3) 盛装したホスペンタール地方の乙女たち．このような衣裳もたいていは母親からのゆずりもの

4) 聖書を手にした娘たちはこれから教会にゆくのであろう．服装は旧教地帯のヴァリス州のもの．

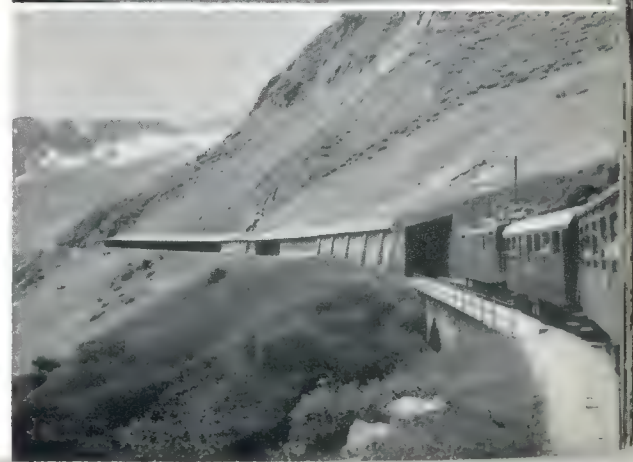
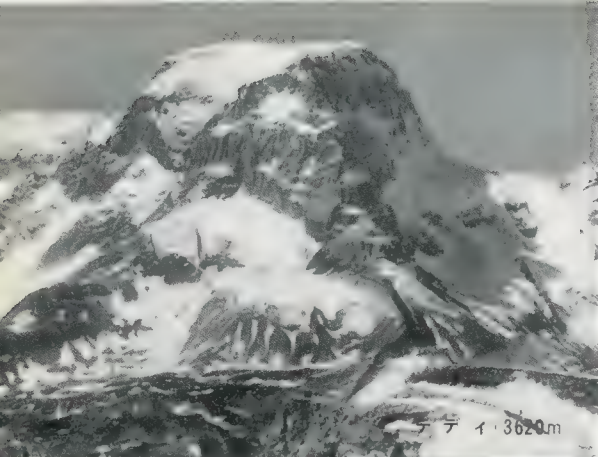
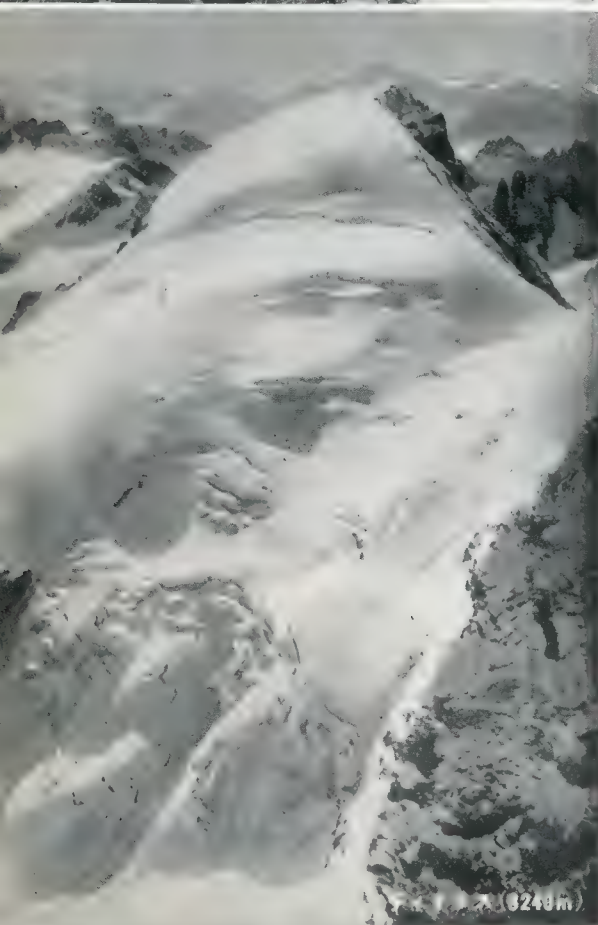
5) スイスの昔そのままの美しい服装の一つである．シュヴィーツの町の婦人たちだが，白いトサカのような帽子が特徴的．

エンガディンへ

オーバーラントやヴァリスの山々を下って，オーバーエンガディンの山群，を訪うには，ふつう「氷河急行」といわれる特別の急行列車が利用される．ツェルマットとサン・モリッツとを結ぶこの列車は，フルカ氷河を眺めながら進み，この名がある．

スーステン峠．鉄道ばかりでなく，山岳地帯をぬってのびている峠道もスイスらしい風景だ．舗装されたりっぱな道路がある．後方にはスーステンホルン(3509m)が見える．

山間を走る氷河列車．雪崩よけのヒサシがところどころにつくられている．

サン・ゴタルト峠の自動車道路．昔はローマ巡礼の歩いた道でイタリアに通ずる．最高点は2114m．

テディ 3620m

(3240m)

氷河急行でサン・モリッツにゆくにはこんな所も通る. フィルスール架橋.

スイスのアルプスといっても, 名の通った高い山ばかりがすべてではないこれらのほかに, 高さも一段と低く, 型もいくらか小さいが, 日本などに持ってくれば, りっぱに超弩級の大物として通用する山々もすくなくない

氷河急行の沿線にも, このような山々が散在していて, 毎年, 何百何千という登山者によって親しまれている 3000m級の山は, またそれなりに4000m級の山とは違った魅力で人々をひきつける.

グロースヴィンドゲーレ(3189m)

ローゼックの谷

ウィンタースポーツで名高いサン・モリッツはよほど大きな、そして重い財布でも持ってゆかないことには楽しめるところではないが、山の好きな人ならばこのサン・モリッツの盛り場は素通りしても思い残すことはない。というのはその谷の奥にベルニナのすばらしい山群が四時雪をいただいて聳えているからだ。山男たちが、ホテルのダンスホールや人の群るスキー場で毎日を暮す人間の気が知れないというのもあながち負惜しみのみではない。

エンガディンと呼ばれるこの地方はスイスからすれば東南のかどにあたるので、峠を越せばすぐイタリアに出られるのだから、山は氷にとざされていても、どこか南からの風がただよっているようなほのぼのと明るい気分に心あたたまる思いがするところだ。イタリアに生れ山岳画家として、その名をうたわれたジオヴァンニ・セガンティーニはその画家としての生涯の大半をこのエンガディンに送りたくさんの名品を残している。サン・モリッツの美術館には彼の有名な『過去、現在、未來』の三部作があるが、一度エンガディンの自然に接した人ならば、彼が半生をこの谷におくった気持がわかるだろう。山のきびしさや冷酷さよりはそれの美しさを一そう強く感じさせるようなエンガディンなればこそ、彼が一年中ここの谷に暮し、絵をかき続けることもできたのであろう。

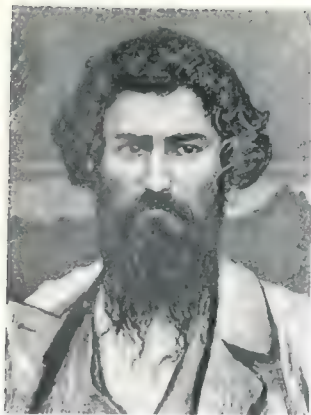
アルプスに詩を求める人はエンガディンに入らなければならない。エンガディンはアルプスのなかの夢の国だ。ここに掲げたシュタイナー写すところの風景なども美しいそして静寂そのもののようなエンガディンのたたずまいをよく物語っている。

エンガディンの春

春たけなわのエンガディンの風景，ベルニナの山群を登る楽しみとともに，このようなエンガディンの美しい春は，訪れる人の心まで和やかにしないではいないであろう．

ダボスにほど近い谷間の一風景．白い壁の家が美しいお花畑にくっきりとはえる．

エンガディンのフェクスタール地方の家．エンガディン地方の家は壁が高く，周囲の風景によくあっている．いかにも平和で，のどかに静まりかえった感じである．

エンチャンの花．「山の眼」ともいわれてこれからエンチャン酒が造られる．人の口によくのぼるエーデルヴァイスはもっと高い地帯までゆかなくては見られない．

ジョヴァンニ・セガンティーニ
(1859～1899) の自画像 (1895).

彼の作品を集めサン・モリッツに
たてられたセガンティーニ美術館.

「春の野」. 山岳画家として知られているセガンティーニの 1895 年の作品. アルプの明るい平和な風景がうつされている. 彼は北イタリアで生まれたが好んでアルプの風物を画き続けた.

「峠の牛」. セガンティーニの1888年の作品. 彼はその最後も海抜2733mのシァフベルグであって, よくアルプスの画家といわれるが正確にはアルプの画家だ.

エンガディン地方には、その美しい風景のため観光地が少くなく、また高地にあるため澄んだ空気と紫外線の強い日光に恵まれているので保養地として知られているところも多い。その典型的なものとして、ダボス、アローザ、サン・モリッツがある。いずれも観光地、保養地、ウィンタースポーツの中心として著名なものだ。

観光地としてこれを見るときりっぱなホテルが立ちならびいたれりつくせりの設備がととのっている。これらのホテルは山間にもかかわらず、世界から集ってくる観光客の便宜も考えられている。たとえばホテルの酒倉にあるブドー酒一つにしても沢山の種類を用意してあるといった工合である。しかしサービスはサッパリとしていて、どちらかというと無骨だとさえいわれている。

また、療養地としては、大規模な療養所があってその近代的な施設はヨーロッパ中から病人を集めている。スポーツ地としてのダボス、アローザ、サン・モリッツはよく冬季オリンピックの会場にあてられるほど条件がよくとくにダボスはその氷の質がよいことで知られている。

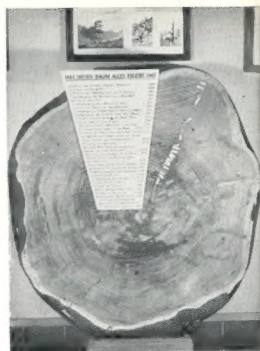
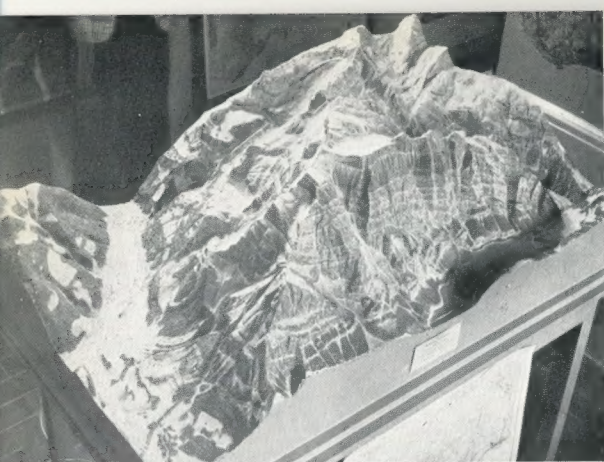
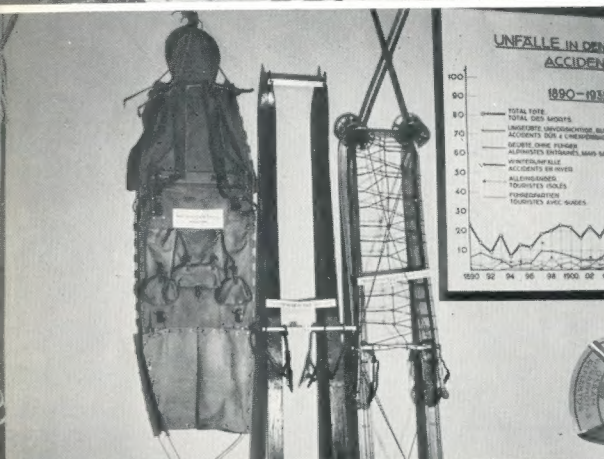
ダボスとアローザ

➡ ダボスのサナトリウムの一つ．結核療養地としてのダボスは，どちらかというと，聖地あつかいをうけているようで，ヨーロッパはおろか，世界中の国からはるばる結核の療養にやってくる．

⬆ ダボスの大通り．山間の小村といっても，ふつうの感じとは少し違うようだ．

➡ アローザ．立ち並ぶ建物はみなホテル

上の写真はサン・モリッツ，ここは人口3000にもみたない町である．1948年の冬季オリンピックはここで開催された．下の写真は珍らしいサン・モリッツ湖上の氷上の競馬．

← サン・モリッツの博物館．スイスには各州ごとにこのような地方博物館があり，その州の古いものや資料などが集められている．サン・モリッツにはこのほかセガンティーニを記念した美術館もある．

山　岳　博　物　館

ベルンにある山岳博物館（スイス山岳会所属）には山岳関係の自然科学や人文科学方面の資料ばかりてなく，登山家のためになるような各種の資料が整理されて陳列してある．もちろん，有名な登山家や山案内の写眞もあって山に登ろうとしてスイスに来た人は，まずここを訪れて，半日を暮すのが順序のようになっている．

◆

山小屋やその内部の模型を見たり，天幕を眺めたりしていると，自分がその中で寝ころんでいるような錯覚を起してしまう．

◆

山をそのまま眺めたようなレリーフなども山の好きなものをたのしませる．

◆

いろいろの遭難救助の用具や注意なども出ている．

スイスの山々
ベルン
アール河
(ベルン)
ローヌ河
(ヴァリス)
ヴァイスホルン
マッターホルン
ドーム
モンテ・ローザ
コンバン
ユングフラウ
アイガー
メンヒ
ブリュムリスアルプ
バルムホルン
アレッチホルン
フィンステラールホルン
シュレックホルン
ヴェッターホルン
ピラトゥス
(ニイードワルデン)
ロイス河
アルトドルフ
リギ
(シュヴィーツ)
ティトリス
スーステンホルン
(ウリ)
テディ
(グラールス)
ライン河
(グラウビュンデン)
アローザ
ダボス
サンモリッツ
ベルニナ
(ティチノ)
ティチノ河
イタリー

ヴェッターホルン